

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580006

研究課題名(和文)「哲学実践」という分野の確立に向けて

研究課題名(英文) For the establishment of "philosophical practice" as a domain of philosophy

研究代表者

河野 哲也 (Kono, Tetsuya)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本において哲学実践を確立することを目的とする。哲学実践とは、主に対話という方法を用いて、実社会のさまざまな問題について哲学的に議論し、相互理解や問題解決に至る活動である。成果としては、子どもの哲学では、全国で20箇所をこえる学校や図書館、児童館などで哲学対話を行い、数校で定期的な実践として教育に組み込むことに成功した。この3年間で子ども哲学はかなり全国的に普及した。哲学的カウンセリングは海外から研究者を招聘して導入した。企業内哲学対話はプログラムを開発し、パイロット講座を開くことができた。重要な著作の翻訳と導入書の出版ができた。哲学対話のNPOと哲学プラクティス連絡会を設立した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to establish philosophical practice in Japan. Philosophical practice is the social practice to argue the various problems in the real world using a way of philosophical dialogue mainly, and to achieve mutual understanding and problem solving. As outcomes, I succeeded in carrying on philosophical dialogues at more than 20 places such as schools, libraries, and daycare centres nationwide and in introducing them to regular curriculum in several schools. Philosophy for children has spread quite nationwide in these 3 years. I invited some specialists from foreign countries to introduce philosophical counseling. Concerning philosophical dialogues in companies, I developed a program and established some pilot courses. I translated two important books and published introductory books. I established a NPO for philosophy practice as well as an association for specialists and researchers named Japanese Association for Philosophical Practice.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：哲学実践 哲学対話 子どものための哲学 哲学カフェ 哲学カウンセリング 企業内哲学対話

1. 研究開始当初の背景

(1) 哲学はこれまでとは異なった役割を求められつつある。七〇年代における応用倫理学の登場、九〇年代の実験哲学の興隆といったより実践的でより生活の現場に密着した実践的な哲学が求められている。これらの動きと平行して、「哲学実践 (Philosophical Practice)」と呼ばれる分野が確立されてきた。哲学実践とは、哲学の知識や思考のスキルを活かした哲学対話を社会の中で実践し、市民社会における諸問題の解決、社会交流、教育として役立てる実践活動のことである。そこには、哲学カフェ、子ども哲学、哲学コンサルティングのようなさまざまな形態が含まれる。哲学実践は、欧北、豪州、南米や東南アジアでも盛んになっており、学会活動も盛んだが、日本ではかなり導入が遅れている。

(2) 東日本大震災以降、優れた公共的な意思決定を行うためには市民による哲学・倫理的な議論と批判的思考力が不可欠であることが理解されるようになった。哲学カフェや子ども哲学の需要は強く、開催数は増加の一途である。

2. 研究の目的

本研究は、1.(1)で述べた日本での現状を踏まえ、哲学実践を国内に体系的に紹介・導入し、実験的な試行を通して知識とスキルを蓄え、実践者の育成を目指すものである。

哲学実践をひとつの実践的な学問分野として確立するための準備作業を行うが、とくに本研究の三年間で焦点化したいのは、子ども哲学の発展と、哲学カウンセリング、企業内哲学対話(あるいは組織アドヴァイス)の導入である。

哲学実践において最も大切なのは直接的交流を通じた試行や実践の積み重ねである。この研究では、研究代表者を中心としながら、大学常勤教員や若手研究者のみならず、実践者、初等中等教育の教員、図書館員など狭義の研究者には含まれない人たちと連携・共同して、さまざまな教育現場で、現場の教育者たちと連携しながら実践を展開した。同時に海外の研究者・教育者たちと交流し、講演会や教育ワークショップを開催し、理論化、制度作り、方法開発、スキル改善、教員教育、評価などの面での実践研究を進めた。

3. 研究の方法

哲学実践分野を確立するための準備作業として、本研究ではとくに、子ども哲学の発展と、哲学カウンセリング・組織アドヴァイスの紹介に焦点を当てる。

子ども哲学に関しては、研究協力者とともに小中学校で教育実践を行い、その記録をもとに研究検討会を行い、実践に関する知識とスキルを高める。同時に、国内外の優れた実

践者・研究者を招聘し、報告を行ってもらう。哲学カウンセリング、企業内哲学対話に関しては、日本にまだ実践者が存在しないため、海外の一級の専門家を招聘し、連続講演会・ワークショップなどを開催して紹介と試験的導入を図る。

本研究が企画する教育実践、研究会・講演会などは原則的に公開として、関心を持つ研究者、学生、教師、実践者が広く参加可能なものとする。関連する他の科研費研究と連携しながら実践研究を進め、ホームページを作成し、学会や講演会などで成果報告を行い、関連書を出版した。

4. 研究成果

以下、研究成果を年度ごとに報告する。

平成25年度は、当初の計画通りに、(1)海外研究者の招聘と哲学実践の新しい形態の紹介、(2)国内における哲学対話の実践、(3)外での実践への参画を行った。

「海外研究者の招聘と哲学実践の新しい形態の紹介」に関しては、哲学カウンセリングの第一人者であるピーター・ハーテロー氏(エラスムス哲学実践研究所所長、オランダ)による3回の哲学カウンセリングと哲学ウォークのワークショップを、5月9日(参加者約30名、12日(約60名)、18日(20名)を行った。哲学カウンセリングは、心理学的な、あるいは精神医学的なカウンセリングではなく、哲学対話の方法論をもちいて病理的ではない個人的な問題について個人的にカウンセリングする方法である。日本では実践している者はなく、方法論のはじめでの導入となった。

同時期に子ども哲学の専門家であるケネス・ロウ氏とクリスティー・チェン氏(ラッフルズ・インスティテューション、シンガポール)による子どもの哲学のワークショップを5月12日に行った。12日は、ハーテロー氏の哲学カウンセリングとの共同開催となり、約60名の参加者があり、盛況だった。ロウ氏とチェン氏によるシンガポールでの子どものための哲学は、学校教科として完全に取り込まれた教育実践であり、細かな教育方法、評価の仕方などについてきわめて有意義で示唆深いものとなった。

また、アメリカ、ニューヨーク市立大学のルー・マリノフ教授を招聘し、企業カウンセリングの講演会を、5月24日(約30名)を開催した。マリノフ氏は、アメリカにおける哲学実践の第一人者のひとりであり、立教大学では、哲学対話を職業化するときの方法と問題点について講演した。連携研究者の寺田俊郎(上智大学)が招聘し企画したワルター・コーハン教授(リオ=デ=ジャネイロ大学、ブラジル)のワークショップに参加した。コーハン氏は、ブラジルにおける子ども哲学の第一人者であり、日本哲学会のワークショップにも登壇し、具体的な教育方法のワークショップ、および、ブラジルをはじめとする

南米での子どものための哲学の普及と現状について講演した。

次に「国内における哲学対話の実践」としては、子どものための哲学としては、関東学院小学校、関東学院六浦小学校、開智学園中等部においてカリキュラムとして組み込まれた哲学対話の授業を担当した。寄居（埼玉県）での北澤裕美子氏主催の「子ども哲学教室」にファシリテーターとして定期的（2ヶ月1回）、豊島岡女子学園の図書館司書、高司陽子氏と共催による哲学カフェの定期開催（年4回）、湘南学園（神奈川県藤沢市）での連続模擬授業、都立城東高校、八王子市立浅川中学校、鳥取県立倉吉高校、学芸大附属小金井中学校での模擬授業、毎日新聞社と連携した「毎小子ども哲学カフェ」を実践した。

企業内のカウンセリングとしては、立教大学ビジネスデザイン研究科兼任講師の宮下篤志氏と連携によって企業内哲学対話の模擬実施をした。また、代官山まちづくりプロジェクトの一環として、「代官山まちづくりカフェ」を実施した。

「海外での実践への参画」では、連携研究者の望月太郎（大阪大学）と連携し、9月にタイ、バンコクのチュラロンコン大学文学部哲学科でのワークショップに参加した。哲学実践、とくに子どもの哲学の日本における実施状況と方法論の説明をした。11月カンボジア、プノンペンのパナサストラ大学における哲学修士課程設立プロジェクトに参加した。道徳教育における対話の重要性についての発表を行った。

平成26年度は、引き続き以下の活動を行った。子ども哲学に関しては、関東学院小学校、関東学院六浦小学校、開智学園、寄居子ども哲学教室、豊島岡女子学園での実践を引き続き行いながら、さらに以下の研究実践を行った。

（1）子どもの哲学の理論的・実践的導入書の刊行：子どもの哲学の実践の背後にある哲学観、社会観、児童観、発達観を平易に説明し、現在、日本で行われている実践とその方法論を具体的に紹介した単著『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』（河出書房新社）を刊行した。また、子どもの哲学の創始者、マシュー・リップマンの主著『探求の共同体』（玉川大学出版部）を共訳し刊行した。

（2）子どもの哲学の新聞紙上哲学対話：毎日小学生新聞日曜版において毎週、「子ども哲学カフェ」コーナーを土屋陽介氏、村瀬智之氏とともに担当し、子ども哲学の普及に努めた。

（3）哲学対話普及のためのNPO法人の設立：哲学対話の普及を目的として、「こども哲学おとな哲学アードコーダ」というNPO法人を設立し、副理事長に就任した。哲学実践の紹介、ファシリテーター養成のためのプログラムを共同開発し、講座を開催した。

（4）対話の評価に関する国際学会での発表：哲学対話を学校での授業や、企業における研修として導入した場合、つねに問題となるのがその効果をどのように測定するかである。哲学対話の教育的効果の測定方法についての研究を哲学者の土屋陽介氏（立教大学兼任講師）、心理学者の宮田舞氏（東大博士課程）と共同して取り組み、8月にベオグラード（セルビア）で開催された国際哲学実践学会で研究発表を行った。

（5）東日本大震災被災地域での哲学対話の推進：立教大学による陸前高田・大船渡地区での支援活動と連携し、市立図書館での哲学対話の準備を進め、大船渡中学での哲学対話を実施し、震災後の地域の問題や未来像について自由に話し合う場所を設けた。同じく国際哲学実践学会にて、井尻貴子氏と共著で被災地の高校での哲学対話の実践を報告した。

（6）企業内哲学対話プロジェクトの推進：企業内において、企業倫理、人生と仕事、リーダーシップ、ビジネスの基本理念などをテーマにした哲学対話のプログラムを立教大学の宮下篤志氏や企業内教育のフェリックス・パートナーズ（株）とともに開発し、パイロット講座を3回開催した。

最終年度である平成27年度は以下の活動を行った。

（1）ヴィクトリア・チェルネンコ氏の招聘：批判的思考と企業内での哲学対話研修の専門家であるヴィクトリア・チェルネンコ氏をロシアより招聘し、4月に立教大学にて、企業内での批判的思考のワークショップの実施方法、哲学カウンセリングの方法など3回のワークショップを行ってもらった。各20名ほどの参加者があった。

（2）子どもの哲学は、引き続き、関東学院小学校、関東学院六浦小学校、開智学園、寄居子ども哲学教室、豊島岡女子学園での実践を行った上に、都立雪谷高校、広島県立広島高校、宮古島宮古高校、大東文化大学第一高等学校、での模擬授業を行った。また、毎日新聞社が企画した「毎小子ども哲学カフェ」（35名）、琉球新報社が企画した「リュウポン子ども哲学カフェ」を大学院生の協力を得て実施した（30名）。引き続き、毎日小学生新聞日曜版において「子ども哲学カフェ」コーナーを土屋氏、村瀬氏、神戸和佳子氏と担当した。お茶の水女子大学附属小学校、関東学院小学校で子ども哲学の評価に関する講演とワークショップを行った。以上のように、この3年間で、子ども哲学の普及に関してはかなりの貢献ができたものと考えられる。

（3）哲学カフェの開催：哲学カフェはいまや全国各地で200カ所以上開催されているが、2016年1月沖縄那覇市でジュンク堂那覇店の協力を得て、沖縄発の哲学カフェを開催した。同じく2月には、神奈川県藤沢市で「湘南哲学カフェ」を江ノ電沿線新聞、湘南アカデミアの協力のもとで開催した。

(4) 哲学プラクティス連絡会の設立：哲学実践の実践者と研究者が一堂に会し、実践報告、研究報告、情報交換ができる場として「哲学プラクティス連絡会」を設立し、10月18日に第1回大会を立教大学で開催した。参加者は250名を超えた。

(5) 企業内哲学対話プロジェクトの推進：引き続き、研究代表者と連携研究者の寺田上智大学教授とが、企業内での哲学対話のプログラムを宮下篤志立教大学講師や企業内教育のフェリックス・パートナーズ(株)とともに開発し、全体として10回ほどのプロトタイプ研修を行った。徐々にプログラムとして確立しつつある。

(6) 研究発表・出版：土屋陽介氏が、研究代表者、宮田舞氏との共著論文を6月にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学で開催された「子どものための哲学国際学会」で発表した。子ども哲学の実施による「心理的開放性」がどのように向上するかについて発表した。また、毎日小学生新聞の「子ども哲学カフェ」コーナーを加筆修正し、河野・土屋・村瀬・神戸共著の『子どもの哲学：考えることをはじめた君に』(毎日新聞出版)から上梓した。リップマン他の『子どものための哲学授業』(河出書房新社)から共訳して出版した。

この3年間の活動により、子ども哲学の普及は本格期を迎えていると評価できる。数多くの初等中等教育で実践し、経験が積み、問題点が明らかになってきた。ファシリテーターの育成も可能になってきた。

哲学カウンセリングや哲学ウォーク、企業内哲学対話を外国から専門家を招聘することで導入することができ、企業内哲学対話は、まだ未完成であるとはいえ、3年間の蓄積により研修用のプログラムが形をなしつつある。

対話の教育評価に関する研究発表を数度行うことができ、また、哲学対話の基本的な理論書の翻訳、実践的な入門書を5冊も出版することができた。

以上の成果により本研究の目的は十分に達することができたといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

河野哲也、学校での哲学対話：子どもの共に考え、学ぶ、グラフィケーション、198巻、2015、11-13. 査読無

河野哲也、こども哲学はどういう教育か?、UTCP Libro Booklet 11: Philosophy for everyone 2013-015、11巻、2015、181-183. 査読無

河野哲也、判断力と批判的思考力を育てる道徳教育(下)、歴史地理教育、828巻、2014、70-77. 査読無

河野哲也、判断力と批判的思考力を育てる道徳教育(上)、歴史地理教育、826巻、

2014、10-19. 査読無

河野哲也、対話による人間性の回復：当事者研究と哲学対話、社会福祉研紀要(立教社会福祉研究所発行) 33号、2014、3-12. 査読無

河野哲也、判断力とコミュニケーション力を育てるこども哲学、日本教育、430巻、2014、16-18. 査読無

河野哲也、自著を語る『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』、週刊教育資料、1310巻、2014、35. 査読無

〔学会発表〕(計11件)

個人発表：河野哲也「教養教育と初年次教育における哲学の意義」国立教育政策研究所 高等教育政策セミナー(7)「哲学教育研究会キックオフミーティング兼研究会 高等教育における哲学教育の意義」深堀聰子(国立教育政策研究所 高等教育研究部)企画、2016年3月3日、於：霞山会館 青花の間(東京都、千代田区)。シンポジウム提題：河野哲也「哲学と人文社会学の明るい未来：これは皮肉ではない」公開シンポジウム、日本学術会議哲学委員会主催 哲学系諸学会連合・日本宗教学研究諸学会連合共済「哲学なしで生きられるのか」2015年12月12日、於：日本学術会議講堂(東京都、港区)

講演会：河野哲也「レポート課題における「問い」の重要性」公開研究会「レポート課題において何を問うべきか? オリジナリティが求められる論題とその評価」、2015年12月5日、於：京都光華女子大学(京都府、京都市)。

Tsuchiya, Y., Miyata, M. and Kono, T. P4C as education for inquiring mind: Evaluating children's open-mindedness in Japanese junior high school, The 17th Conference on International Council of Philosophical Inquiry with Children, June 25th 2015, University of British Columbia, Vancouver (Canada)

個人発表(招待)：Kono, Tetsuya, "Deliberative Democracy and Philosophy for Children in Japan", 第四回日中哲学フォーラム「日中の哲学者がともに考える--哲学の原理的あり方と現代社会における役割」、2014年9月20-21日、北京外国語大学(中国)。

共同発表：Ijiri, Takako & Kono, Tetsuya, "Philosophical practice for high school students after the Great East Japan Earthquake on 3 November 2011", 13th International Conference on Philosophical Practice (ICPP) Philosophical Practice as a Profession and as a new Paradigm in Philosophy, 15-18 (18) August 2014, University of Belgrade, Belgrade(Serbia).

Plenary: Kono, Tetsuya, "Debate on philosophical practice in the East and in the West", Moderator: Peter Harteloh, *13th International Conference on Philosophical Practice (ICPP) Philosophical Practice as a Profession and as a new Paradigm in Philosophy*, 15-18 (16) August 2014, University of Belgrade, Belgrade (Serbia).

共同発表: Kono, Tetsuya, Tsuchiya, Yohsuke, and Miyata, Mai, "Evaluating philosophical dialogue", *13th International Conference on Philosophical Practice (ICPP) Philosophical Practice as a Profession and as a new Paradigm in Philosophy*, 15-18 (15) August 2014, University of Belgrade, Belgrade (Serbia).

ラウンドテーブル・ディスカッション:
Kono, Tetsuya, *Roundtable on Critical Thinking and Philosophical Practice*, 19-20 December 2013, Department of Philosophy, Chulalongkorn University in collaboration with the Project "Philosophical Practice for Peace Buildings" Osaka University, Toyonaka-shi, Osaka (Japan).

指定討論: 河野哲也、日本科学教育学、課題研究「科学教育における対話性」オーガナイザー: 吉岡有文, (立教大学) 2013年9月8日, 於: 三重大学(三重県、津市).

個人発表: Kono, Tetsuya, "Moral education in Japanese primary and secondary schools and the Challenge of P4C", *The International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC) CONFERENCE 2013*, 31 AUGUST 2013, School of Education, University of Cape Town, Cape Town(South Africa).

[図書](計5件)

Kono, Tetsuya, "Philosophical Practice in Japan" *Practicing Philosophy*. Fatić, Aleksandar and Amir, Lydia (Eds.) Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, 2016, 320(182-202).

河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・神戸和佳子、毎日新聞出版、子どもの哲学: 考えることをはじめた君へ、2015、212.

リップマン・マシュー他著、河野哲也・清水将吾監訳、河出書房新社、子どものための哲学授業、2015、384.

河野哲也、河出書房新社、「こども哲学」で対話力と思考力を育てる、2014、219.

リップマン・マシュー、河野哲也他訳、玉川大学出版部、探求の共同体: 考えるための教室、2014、460.

[その他]

ホームページ等

特定非営利活動法人 こども哲学おとな
哲学アーダコーダ: <http://ardacoda.com>

哲学プラクティス連絡会:

<http://philosophicalpractice.jp>

河野哲也の哲学・倫理学研究室:

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/tetsuyako/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野 哲也 (KONO, Tetsuya)

立教大学・文学部・教授

研究者番号: 60384715

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者

寺田 俊朗 (TERADA, Toshiro)

上智大学・文学部・教授

研究者番号: 003396574

望月 太郎 (MOCHIDUKI, Taro)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号: 50239571